

第 67 回神奈川建築コンクール 住宅部門審査総評

審査委員：鈴木 信弘

本年度の住宅部門には 27 件の応募があり、審査資料を精読したうえで投票・合議を経て 12 作品を現地審査とした。二次選考では、周辺環境との関係、設計主旨と実空間の整合性、居場所や各室の構成、仕上げや質感などを多角的に検討した。最優秀賞の選考は三作品が拮抗し難航したが、最終的に持続性や地域への貢献度の観点から差が見出され、最優秀賞 1 点、優秀賞 7 点、アピール賞 1 点を選定した。以下、入賞作品を紹介する。

最優秀賞は「**本郷台の家**」である。大谷石の雛壇造成を改め、道路沿いに緩やかな丘陵を復元し、塀を設けず植栽で景観を開いた点が、住宅地の新たなあり方を示す提案として評価された。室内は高低差を生かした連続空間で構成され、ラウムプランによって多様な視点場と適度な距離感を生み出している点も高く評価された。

「**大磯のすまい**」は、親子二世帯を分棟型で構成し、狭いアプローチから北庭へ導き、その庭を共有空間として関係を調整した点が評価された。住戸と庭を一体で計画した好事例だが、室内の居場所の展開がやや乏しい点は惜しまれる。

「**窓辺に住まう**」は、小規模ながら寸法体系が丁寧にまとめられ、手触りやテクスチャーも高い完成度を示す。特に 2 階の格子出窓は心地よく、多様な居場所を生んでいる点が印象的であった。一方、1 階は就寝やプライベート空間が中心で外部との接続は控えめだが、街路の入隅に開かれた玄関土間が周囲との緩やかな関係を生み出している。

「**山の根の躯体**」は、通常なら建築を断念する急傾斜地に、あえて楔を打ち込むように建てた明快な意志が感じられる。住宅に日常を当てはめるのではなく、「この舞台で暮らしたい」という家族の強い想いを優先した計画である。厳しいコスト状況を越えて実現した建築には、勢いと潔さがあり、清々しさを放っていた。

「**つながる塀の家**」は、敷地内に塀を取り込み、街との接点や両親世帯とのつながり、さらにプライベートな領域をつくり出した住宅である。深い庇やトップライトにより多様な表情をもつ点が評価されたが、核となる十字の RC 塀は内壁の一部に収まり、存在感が弱まったのは惜しまれる。

「**まごころアパート松葉台**」は、高齢者支援と地域コミュニティ再構築を目指した見守り機能付き賃貸住宅である。既存アパートを改修し新棟を加えて広場を設け、交流の場を創出した。孤立や空き家といった課題に対し、見守りや相談に応じるコンシェルジュを配置し、自立を支えながら地域とつながる新しい住宅像を提示している。既存住宅地の共同住宅に新たな方向性を示す点が評価されたが、運用前であり今後の展開を見守りたい。

「**STAINED TERRACE—Saluton**」は、区画整理で街並みが一新された地域に建つ店舗併用の 6 階建住宅である。施主の旧宅に含まれていた要素を参照し、多様な開口を外壁に穿つことで複雑で豊かな表情を与えた点が評価された。さらに、設計者と施主が対話を重ね

て結実したプロセスそのものにも意義が認められた。

「鎌倉の住宅」は、道路側から背後の山斜面が透ける両面ガラス張りの構成で、外皮以外を持たない空洞のような建築である。2層分の土間は外部に近い空間となっている。内外の関係を徹底的に消去しようとする意志が感じられ、従来の住宅観に挑戦する姿勢が注目された。一方、夏の晴天下での温熱環境は厳しく、今後の持続性を見守りたい。

「さちが丘の家」は、夫婦と猫1匹の終の住処として計画された住宅である。諸室をアルコーブ状に集約し、回遊できる構成で互いの気配を感じながら過ごせるワンルーム空間を実現した。UA値0.42、 η AC値2.00で断熱等級6を達成し、高气密高断熱を実証。ルームエアコン1台で快適に室内を保てる性能を評価しアピール賞（環境）とした。